

慰安婦小説『母・従軍慰安婦』の一考察

——ジェンダー表象の政治学と脆弱な男たちの「戦い」の後で

李 恵 慶 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

キーワード：慰安婦小説、他者の他者化、女性嫌悪、象徴的去勢、国家身体、物語＝歴史、再男性化

はじめに

『母・従軍慰安婦』⁽¹⁾は、1982年に韓国の現代文学を代表する女性作家・尹静慕⁽²⁾によって発表された中編小説である。太平洋戦争当時、日本軍に性的に搾取されていた朝鮮人女性を描いたものとして、おそらく韓国の文壇では初めての試みだっただろう。そのた

めか、韓国国内のみならず、海外でも韓国を代表する“慰安婦小説”として最も知られている⁽³⁾。

だが、こうした評価とは裏腹に出版当初の注目度は決して高くなかった。当時はまだ慰安婦問題に対する社会的関心が低く、新聞の新刊紹介コーナーでもかろうじて一社のみが「世界第二次大戦中、挺身隊として南洋諸島の最前線で日本軍の性的対象となった朝鮮女性たちの絶叫」⁽⁴⁾を描いたものと紹介するだけだった。

ところが、1990年代に入ると、状況は打って変わる⁽⁵⁾。元慰安婦の金学順ハルモニが名

- (1) この作品の原題は『에미 이름은 조선씨였다 (かあさんの名は朝鮮ピーだった)』である。1992年に神戸学生青年センター出版部から和訳・出版されたときは『母・従軍慰安婦』というタイトルがつけられ、原題は副題となった。本稿では和訳のタイトルを用いることにし、本文での引用は頁数のみを記す。また「従軍慰安婦」「慰安婦」「日本軍慰安婦」という用語を混用しているが、それらの間に意味の違いはなく、文脈や日本と韓国の慣習的な使い方等を考慮し相応しいと思われる表現を取っていることを断っておく。テキスト分析の際は、韓国語版は尹静慕『かあさんは朝鮮ピーだった』タンデ、2005年を、和訳は尹静慕『母・従軍慰安婦』（鹿嶋節子訳）神戸学生青年センター出版部、1992年を使用した。
- (2) 尹静慕（1948年～）は現代韓国文学を代表する女性作家の一人である。大学在学中の1967年から創作活動を始め、1981年『女性中央』の公募当選作『壁のなかの娘たち』で正式に文壇デビュー。冷戦構造下の反共イデオロギーがもたらした日常的暴力と非人間化、民族的な自主性、社会的差別、女性問題等、現代の韓国社会が抱えている様々な問題にメスを入れた作品を多く発表し、大衆的な人気を博している。
- (3) それについては、2014年『月間文化空間』とのインタビューで作家自らが言及している。彼女によると、自分は「元植民地（——韓国、引用者）の作家のなかで初めて慰安婦を描いた」人として、日本・豪州・中国・ドイツなどの大学から呼ばれ、慰安婦問題を広めてきたという。ここで明らかにように、彼女と『母・従軍慰安婦』が韓国を代表する慰安婦作家・作品となったのは「初めての試み」という作品の先駆性と不可分である。インタビューは、<http://yunsamo.com/board/index.html?id=board09&page=5&no=103> (visited on 30 June 2017) で確認できる。ちなみに本稿でいう“慰安婦小説”とは日本軍慰安婦を主題化し、女性の人権を蹂躪していた慰安婦制度と帝国主義の暴力を問い直す文学作品を指す。
- (4) 『京響新聞』、1982年12月14日付。またつとに指摘されているように、韓国では「慰安婦」と「挺身隊」の混用がよく見られる。ここでは深入りしないが、尹明淑『日本の軍隊慰安所制度と朝鮮人軍慰安婦』明石書店、2003年や、秦郁彦『慰安婦と戦場の性』新潮社、1999年、高崎宗司「半島女子勤労挺身隊について」『「慰安婦」問題 調査報告・1999』財団法人女性のためのアジア平和国民基金、1999年などを参照。
- (5) 韓国では1970年代前半にも慰安婦問題への関心が高まったことがある。これについては木村幹「国際紛争以前の韓国における慰安婦問題をめぐる言説状況」『国際協力論集』第22巻第2・3号、神戸大学、2015年、43～62頁を参照されたい。

乗り出ると慰安婦問題に対する社会的関心が急激に高まり、以降、様々な取り組みが世界的な広がりを見せるようになる。こうした大きなうねりのなか、『母・従軍慰安婦』にも再注目が集まり、小説が再版されるだけでなく、様々な慰安婦関連文化的生産物に影響を及ぼしながら繰り返し再生産される⁽⁶⁾。

『母・従軍慰安婦』は一見慰安婦小説のようにみえる。先述したように、テキストでは太平洋戦争当時の朝鮮人慰安婦らの物語が紙面の多くを占めており⁽⁷⁾、「挺身隊」という名で慰安所に連れて行かれ、慰安婦になった主人公「僕」の母親の「一生の不幸」(79頁)が余すところなく描かれている。そのためか、出版当初から慰安婦小説と見なされ、現在もその見方はまったく変わっていない。否、むしろ強まっているといった方が的確である。

確かにこのテキストの慰安婦物語には「激しい性器の銃撃」(115頁)に見舞われ、「死を覚悟しなければならないほど恐ろしい生き地獄」(86頁)を生き抜いた母親＝慰安婦らの苦悩と悲しみがよく形象化されており、その限りにおいては慰安婦小説といっても間違いではない。ただ、そうした見解はあまりにも性急な判断といわなければならない。というのも、一面においては正しいが、全体的にはかなり短絡的で皮相な判断という他はないからである。この作品の本質は決して慰安婦の苦しみと悲しみといった一言で片づけられるほどの単純なものではなく、注意深く読まなければならない。

結論からいうと、この作品は慰安婦小説ではない。何より「慰安婦」という女性身体に対する嫌悪感がテキストを貫いており、彼女らの「声」は大きな物語に組み込まれ、見事

にかき消されているからである。慰安婦物語は表層的な題材に過ぎず、その背後で紡ぎ出されているのはあくまで傷つけられた男性性＝「父性」の復権なのである。テキストの後半に挿入されている慰安婦物語は、脆弱な男たちを再男性化へ導く導管に過ぎず、それ以上でもそれ以下でもない。その意味ではこのテキストは慰安婦小説どころか、むしろ「反」慰安婦小説と呼ぶしかない。

それがどういったことなのかを明らかにするために、以下では登場人物をめぐるジェンダー表象と、主人公の「僕」と父親の確執と和解の物語に焦点を当てて、このテキストの政治的無意識を読み解く。

1. 慰安婦物語におけるジェンダー表象

1.1 女性登場人物をめぐるステレオタイプと少女＝処女への拘り

テキスト分析に入る前に、ここでは慰安婦物語における登場人物らがどのように描かれているのか確認することにする。まず、慰安婦の描かれ方に注目してみよう。

このテキストの慰安婦表象において特徴的なのは、母親を初めとした朝鮮人慰安婦と日本人慰安婦との対照的な姿である。母親が慰安婦となったのは挺身隊への志願がきっかけであった。「兄さんの徴用の代わり」(80頁)といわれていることから分かるように、彼女が挺身隊に願い出たのは「家」を守るためであり、後に明らかになるが、それは彼女の存在意義と深く関わっている。ただ、彼女の志願理由はそれだけではない。そもそもその志願が「解放（——日本の敗戦、引用者）の前の前の年の秋」(同頁)であったことを考え

(6) なかでも映画界の動きは早く、出版から間もない1985年に『女子挺身隊』というタイトルで映画化された後、1991年には原作と同名のタイトルで再映画化された。一般的に知られているのは後者で、大々的な海外（現地）ロケと多くの外国人俳優の起用といったリアリティの追及が話題を呼び、注目の的となった。また近年では、2013年に舞台化された『鳳仙花』に異例の反響が集り、韓国のみならず世界で繰り返し上演されている。それには2000年に開かれた「女性国際戦犯法廷」以降に目立つようになった慰安婦問題の「世界化＝アメリカ化」が影響しているように思われる。

(7) このテキストは前半と後半の二部構造になっており、後半に挿入されているのが元慰安婦の母親を物語の中心に据えた慰安婦物語である。

ると、あくまで個人の自由意思とは見なし難い。

あたかもそれを明かすかのように、母親の「志願した」という語の直後には次のようなことが挿入されている。「そうやって志願しなかったとしても、愛国班⁽⁸⁾がわたしを黙って放っておきはしなかっただろう。あの頃は、駐在所主任、面長、面書記、区長まで、娘の供出に血眼になっていたからね。うちの村では、わたしを除いても、五人の娘が動員さ」(80 頁) れ、「みんな九州にある軍隊の洗濯婦に行くんだと思っていたよ」(同頁) という。

ここで明らかなように母親の「志願」は半ば強制的で⁽⁹⁾、しかも騙されての選択だったのであり、「兄の徴用の変わり」と「娘の供出」の間で行われたその「志願」からはとりあえず家族思いの純真な姿がうかがえる。

そうした母親と対極に位置しているのが日本人慰安婦である。南洋諸島の慰安所に向かう船の中では両者の相違が顕著に表われている。「九州にある軍隊の洗濯婦」になるとばかり思っていた母親らは、日本人慰安婦らの異様な姿を目にして「胸を締め付けられ」(82 頁) る思いをする。「みんなお金でも稼ごうと、前借金をたくさんして志願してきた娘や売春婦」(81 頁) であった彼女らは、「空気の濁った船室で、煙草は吸うは、かばんの中から清酒の徳利を取りだしてちびちびやる女もいるはで、白い太腿と上半身をむき出しにして、扇子でバタバタするものもい」(同頁) る。

思いのままに時間を過ごし、振舞っている「百名ほど」(同頁) の日本人女性らの「大胆」で「不作法」(同頁) な姿が、「黒いチマに白いチョゴリー色」(81 頁) の「ふろしき包

みを胸に抱」(同頁) き、「どこへ連れて行かれるのかわからず、おどおど」(同頁) する母親らの姿といかに対照的なのかはいうまでもない。しかも騙されてきた母親らを見るや否や、これからの「洗濯」の「仕事」が、「手でするんじゃないくて、股を開いてする」(同頁) ことを告げて嘲笑う日本人慰安婦らの姿は、母親らの純朴な田舎者のイメージをさらに際立たせる。

連行の場面で強調された母親らの純粋さは、後に少女＝処女性と結び付き、このテキストの慰安婦物語をドラマティックなものにする。「田舎娘」「生娘」といった語が繰り返し登場しているのはそれと無関係でない。欲望をむき出しにし、「性器の銃撃」(115 頁) を行っていた日本軍に「死ぬそのときまで身体を提供」(87 頁) し、精液まみれとなった少女の姿ほど、慰安婦らの衰れを止めるものはない。むろん、そうしたレトリックはこのテキストに限るものではなく、慰安婦物語のステレオタイプとして今もなお繰り返し再生産されている。

そこには様々な問題が内包されているが、とりあえずここでは『母・従軍慰安婦』における慰安婦表象が純粋さと性的放蕩との二項対立の構図のなかに配置され、朝鮮人慰安婦を特徴づける純粋さは後に処女性へとすり替わり、日本軍の性暴力を浮き彫りにする役割を担っていることを指摘しておく。

1.2 男性登場人物におけるステレオタイプと国家身体

続いては、男性登場人物の描かれ方をみてみる。これも基本的には上記の慰安婦表象と

(8) 「内鮮一致」が掲げられた 1936 年以降になると日本本土だけでなく、植民地朝鮮でも国民精神総動員が行われる。そこで結成されたのが 1939 年の朝鮮連盟組織としての愛国班である。この組織の活動については国民総力朝鮮連盟編『朝鮮に於ける 国民総力運動史』国民総力朝鮮連盟、1945 年に詳しい。

(9) 辞典的な意味での「強制連行」は「人を強制的に連行すること」、すなわち「本人の意思とは関係なく、むりやりに連れて行くこと」である。ただ、その語は人や文脈によって意味・解釈の違いがみられ、定義が確立されていないのが現状である。日本語の文脈では一般的に戦時体制下の国家総動員法制定に伴った朝鮮人労働動員を指しているのに対し、韓国ではすべての動員、すなわち日本兵や軍属、従軍慰安婦も強制連行と見なされている。『母・従軍慰安婦』でも韓国の広義の意味で用いられている。とりわけ朝鮮人強制連行については、金英達『朝鮮人強制連行の研究』明石書店、2003 年や、外村大『朝鮮人強制連行』岩波書店、2012 年を参照。

同様、日本兵と朝鮮人学徒兵との相反する姿によって具象化されている。まず、日本兵から確認してみよう。

何と言っても彼らは母親らを家族と引き裂き、「一生の不幸」に陥れた許し難い存在である。そうした日本兵を特徴づけているのが過剰な男性性である。それはまず、性的な淫らさとして表われる。慰安所の部屋の前に並ぶや否や「ベルトを解いて、下履もずり降ろして」(88頁)は、「先に入っている者に、早く済ませろとどなった」(86頁)り、「朝鮮ピーは、みんな死んだふりをするからと、冷たくなって死んでいく身体の上に乗り続け」(87頁)る日本兵らの姿はその典型である。

同様なことはテキストのあちこちに鏤められていて枚挙に暇がないが、なかでも注目に値するのが性と暴力との表裏一体の関係性である。敗走部隊で起きた人肉食のエピソードはその最たる例で、そこでは日本軍の淫らさが極限において非人間的な残忍さとして露呈している。

連合軍の攻撃が強まると、日本軍は敗走を余儀なくされる。日本兵に逃げられ、現地に取り残されていた母親らはやっとの思いで敗走部隊に合流する。そこで最も苦しめられたのが飢えである。

食料が底をつくともみんな一日中、「山の実やきのこ、草の根、ざりがになど」(107頁)の食べものを求めて彷徨い、その挙句に「みみずや虫」「山蜘蛛、蛇まで捕まえて食べるまでにな」(同頁)る。なかには虫などを間違えて食べて腹痛を起こしたり、蛇に噛まれたり、また病気や栄養失調で命を落とす人もいて、最初「千人をはるかに超えていた」

(108頁)敗走部隊は、「日に日に人数が減って」(同頁)く。そんななか、「三味線だけをもち歩いて一人の演芸人の娘が、陣営の外で殺され」(109頁)る事件が起こる。

娘が食べ物を求め、「水溜まりを漁ってざりがにを捕まえて」(同頁)ると「やはり、食べものを探そうと」(同頁)ひとりの兵士がやってくる。そして突然彼女を襲う。男性性を剥き出しにしていた日本軍といえども、長引く敗走で「生きること追われて、性欲も衰えてしまったかのような」(同頁)が、若い「娘を見た瞬間、卑しい根性を起こし」(同頁)たのか、その兵士は急に「獣」と化し、彼女に襲いかかる。

次の瞬間、娘は「横にあった三味線をとって、男をぶん殴」(同頁)る。すると「悪辣なその軍人」は、「容赦な」く「娘を銃剣で突き刺」(同頁)しては、集まってきた仲間らと「まだ死んでもいない血まみれの娘の身体を、まるで一匹の鳥でも捕まえ」(同頁)たかのように、「剣で太腿を切り取っ」(同頁)て食べる⁽¹⁰⁾。

あたかもカニバリズムを連想させるこのエピソードが日本軍の残忍さを暴いているのは疑いの余地がない。ただ、それが娘に対する性的侵犯の失敗によってもたらされているのは注目してよい。

フロイトの精神分析から明らかなように、人間の二大欲求である食欲と性欲は互いが緊密につながっていてときより暴力性を帯びる⁽¹¹⁾。それが最も顕著に表われているのが幼児性欲である。「リビドーの口唇体制期において、対象を愛し手に入れることは、また対象を消滅させることと一致している」⁽¹²⁾といわれていることからわかるように、食べることは他

(10) 戦時の日本軍の人肉食に関してはこれまでも度々指摘され、数多くの証言が残っている。なかでもよく知られているのが「小笠原事件（父島事件）」である。父島に駐屯していた日本軍が捕虜のアメリカ軍を処刑し、その人肉を嗜食したとされる事件で、戦後、グアム軍事裁判にて裁かれた。だが、当時の関係者の発言からは否定の声もあり、今後更なる検討が必要と思われる。「小笠原事件」について詳しくは秦郁彦『昭和史の謎を追う』文芸春秋、1999年を参照。

(11) この点についてはラブランシュ・ボンタリス『精神分析用語辞典』（村上仁監訳）、みすず書店、1977年、なかでも「体内化」「取り込み」「同一化」「食人的」などの項を参照。またフロイトのテキストでは「トーテムとタブー」「否定」「快感原則の彼岸」などを見よ。

(12) ジークムント・フロイト『快感原則の彼岸』『フロイト著作集6』（井村恒郎訳）人文書院、1970年、186頁。

者を攻撃する欲望と緊密に結び付けられている。

そうすると上記の「人肉鬼」エピソードは人間の欲望における原初的な暴力性をよく示すものであり、そうした欲望を露わにした日本人は忽ち「未開」な民族として他者化される。このような日本兵の性的淫らさと残忍さに裏打ちされた原初的で過剰な性的欲望は、次第に民族差別的な言説へ統合され、人種的民族の劣位性にすり替わる。

そうした日本兵と正反対なのが朝鮮人学徒兵である。このテキストでは二人が登場する。一人は十五歳の少年航空兵で、後に神風特攻隊員として命を落とす人物である。もう一人は留学先から帰郷途中に連行されて学徒兵となり、後に主人公「僕」の父親となる人である。二人を指す「少年兵」「学徒兵」という語から読み取れるように、彼らからも朝鮮人慰安婦と同様の若さと純粋さが目立つ。

彼らに最も特徴的なのが男性性の欠如である。童貞として命を落とした少年兵はいうまでもないが、彼だけでなく、もう一人の学徒兵が脚に怪我を負っていたのは偶然ではない。少年兵の場合、母親と出会う「一月前に足に貫通傷を受けて陸軍病院に入院し」（89頁）ていて、脚が治るや否や特攻隊として出動し「犬死に」になる。もう一人の学徒兵は太腿に大怪我をして「安楽死」という絶体絶命の危機に追い込まれたものの、母親らに助けられ命拾いする。

わざわざフロイトを引用するまでもなく脚は男根のメタファーである⁽¹³⁾。そうすると機能不全に陥った彼らの脚は象徴的去勢に他ならず、彼らが性的欲望とほとんど無縁だったのは、そうした傷ついた男性性と不可分の関

係にある。

ここでひとつ注目に値するのが彼らの身体の象徴性である。脚の怪我で自力では立ち上がれず、地面を這う姿は、植民地として主権を失っていた国・朝鮮の姿と重なり合う。男性性を傷つけられた彼らの身体は国家身体として機能しているのであり、特に後に主人公の父親となる学徒兵はきわめて象徴的である。それは彼が唯一苗字を持つ人物ということと無縁ではない——これについては後述する。

以上のように『母・従軍慰安婦』における男性登場人物は、日本兵と朝鮮人学徒兵との対比によって形象化されている。前者には性的猥雑さと残忍さによって過剰なまでに男性性が強調され、後者からはその脆弱さが目立つ。そうした彼らの身体はそれぞれ国家身体として機能する。

あたかも勃起した男根のように「性器の銃撃」を行う日本兵の姿は、当時周辺国を植民地化し、力を拡大していった末、戦争まで起こした日本帝国と合致する。一方、脚を怪我し歩くこともままならない朝鮮人学徒兵の姿は主権を奪われ、何もかも植民者に従わざるを得なかった朝鮮と重なる。その意味では特攻隊員として無事な死を遂げた少年兵⁽¹⁴⁾や、一応生きて帰国したものの、やがては「日本の亡霊」（61頁）の虜になり、幻覚に悩まされながら亡くなる学徒兵は植民地朝鮮の悲しみが集約された人物といえる。

2. 朝鮮人慰安婦における眼差しの重層性と自己矛盾

(13) フロイトの『精神分析入門』では夢における男性器の象徴が列挙されており、長く突き出されたものや、身体を傷つけるもの、水を出すものなどがその代表として挙げられている。その意味では腕や脚も男根のメタファーとして見なされる。詳しくはフロイト『精神分析入門（上）』（高橋義孝・下坂幸三訳）新潮社、1997年、なかでも「第十講 夢の象徴的表現」を参照せよ。また、藤田博史も男性器の代用物として鼻や太腿、脛、脚、靴などを挙げている。これについては藤田博史『人形愛の精神分析』青土社、2006年を参照。

(14) 本文で述べたように、少年兵と学徒兵の脚の怪我が象徴的去勢であるのはいうまでもないが、少年兵が特攻隊員として命を落としたのは彼の脚の回復と無関係ではない。それは男性性の回復と同義であり、また「日本兵」となった彼は死ぬことになる。その意味では戦時中の二人の朝鮮兵の運命を分けたのは、脚の機能回復＝男性性の回復にある。

2.1 ねじられた「純潔」への拘り——歪んだ眼差しと民族的優位性

繰り返しになるが、このテキストの朝鮮人慰安婦らの特徴づけているのは純粋さであり、彼女らの少女＝処女性は慰安婦物語をドラマティックに展開させる⁽¹⁵⁾。しかし注意すべきはそれが彼女らにとって諸刃の剣となっていることである。

母親らは純潔性に拘る。それは当然、処女を失った後から目立ち始める。彼女らが慰安所に着いてから間もなく業主の「袖の下」(85頁)として将校に上納され処女を奪われると、これまでの少女＝処女性観念的な性的純潔性へすり替わり、異常なほどに執着する。

詳しくは後述するが、このテキストではそれがすでに慰安婦物語の冒頭から垣間見られている。先述した南洋諸島に向かう軍用船でのエピソードはその好例である。そこで打ち出されている母親らの、「お金を稼ごう」と「志願してきた」(81頁)日本人慰安婦への忌み嫌いが、彼女らの純粋さに裏打ちされているのは明らかである。純真な母親らにとって「売春」は「不潔」と同義であり、それゆえ、日本人慰安婦らに差別的な眼差しを向ける。当然ながらそうした眼差しは処女を奪われた後になるとますます強まる。

そのなかで注目し値するのが、母親らの性的淫らさに対する忌み嫌いとの差別的な眼差しの拡大である。慰安婦物語の中盤になると、これまで日本人慰安婦らの特徴づけていた性的ふしだらさは、日本人女性の普遍的で本質的な属性として位置付け直される。太平洋戦争末期、母親らと同様、敗走部隊に合流していた民間人の日本人女性をめぐるエピソードではそれが明確に読み取れる。

連合軍の攻撃が激化し軍駐屯地の近くまで爆撃が迫ってくると、日本軍は日本人慰安婦と慰安所を管理していた抱主、老婆だけを連れて兵営からこっそりといなくなる。「もぬけの殻」(94頁)と化した慰安所に「ごみのように捨てられ」(同頁)た母親らは、「目の前が真っ暗にな」(同頁)りながらも荷物をまとめて避難を始める。やっとの思いで合流した敗走部隊には、すでにフィリピン各地から撤退してきた敗残兵の他に「看護員、商店員、演芸人など」(108頁)の民間人も多くいて、婦女子の数も相当数に上る。

先述のように、敗走中のかれらが最も苦しめられていたのが飢えである。食べ物の入手が困難になるにつれ、みんな「飢えた狼のように野生だけが残って、お互いがお互いを警戒し、椰子の実ひとつでも殺人劇が繰り広げられ」(同頁)る。やがて民間の婦女子からは「食べ物さえくれるなら、どんな男にも身を任せ」(同頁)る人が出る。それをみた母親らは「必ずしも腹が減ったためではな」(同頁)く、「その国の人」が「大抵貞操観念がなかったからだ」(同頁)と罵倒し、嫌悪感を露わにする。

おそらく飢えを凌ぐために選択されたはずのその行動が、日本軍の性暴力に曝されていた母親らには到底受け入れられるものではなかっただろう。ただ、問題は個々人の行動がその国や民族の普遍的なものとして本質化され、民族主義的言説へ横滑りしていることである。これまで日本人慰安婦らの特徴であった性的だらしなさは、いつの間にか「貞操概念」といった抽象的概念にすり替わり、その低さは民族的特徴として再構築される。それにより、日本人(女性)は「未開」な民族と

(15) 同様なことが占領期にアメリカ軍に性暴力を受けていた「占領期慰安婦」や「パンパン」と呼ばれた人たちのなかにもみられる。彼女らからも「処女」は特権的記号として語られ、アメリカ軍の暴力を暴く最もドラマティックで強力な手段として機能する。詳しくは、茶園敏美『パンパンとは誰なのか——キャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』インバクト出版会、2004年を参照。

(16) このテキストにおける日本人や日本民族に対する「未開」の位置づけは、日本人女性の貞操概念の低さを示すエピソードの直後に挿入されている日本軍の残酷性と相俟って確固たるものとなっている。先述の日本軍兵士らの人肉食のエピソードの直後から「野蛮人」「弱肉強食の動物」「原始人」「虫にも劣るやつら」といった民族的劣等性を示す語が多用され、これまでのかれらに対する差別的な眼差しは民族差別的言説に回収される。

して位置づけ直され、他者化される¹⁶⁾。

母親らの純潔性への拘泥が不本意にも日本軍の「性欲処理場」(119頁)として、「たくさんの精液を、糊のように浴び」(同頁)てきたことに対する純潔コンプレックスと無縁でないのはいうまでもなからう。「不浄な身」となったことへの罪責感が純潔性への執着として外在化し、他者に差別的な眼差しを向けていたことは想像に難くない。それにより、表層的なものではあれ、「朝鮮ピー。一回三円」(85頁)というように、これまで日本(軍)に民族的・ジェンダー的差別を受けていた彼女らの劣等性はひっくり返される。そこではもはや「汚い動物と同じ」(88頁)者ではなく、「貞操概念」の高い「文明人」として優位に立つ。

ところが、こうした立場の転倒には看過できない問題が孕まれている。そもそも性的清らかさを示す処女性が、男性中心的社会が欲望する女性神話に過ぎず、その特権性は強い女性嫌悪によって支えられているからである。このテキストが女性嫌悪に満ちているのは偶然ではない。母親らが帰国後、「不浄＝恥」な存在としてテキストの片隅に追いやられ、不可視化されていたのはそれを端的に物語る。性的純潔をめぐる彼女らの論理的矛盾はかえってその存在を危うくし、物語からも後景化し、あらゆる面で忍従を強いられる。

2.2 内在化された植民地主義的な眼差し

——他者の他者化

ところで、日本人慰安婦・女性に対する母親らの歪んだ眼差しと他者化は、現地のフィリピン人慰安婦をめぐるさらに複雑になる。繰り返しになるが、ある日突然「現地にゴミのように捨てられ」(94頁)た母親らはとりあえず荷物をまとめ、避難することにする。しかし土地鑑がなく、どこへ向かえばいいのか途方に暮れる。

とりあえず大きな道に沿って歩き出した母親らは、途中で「運よく現地のフィリピン人の慰安婦と親しくな」(96頁)る。「故郷がルソンだとい」(同頁)う彼女は「日本軍は、

きっとルソン島北部のバギオへ逃げたんだろうと、たどたどしい日本語で教えてくれ」(同頁)る。しかも異国の地に「捨てられ」た母親らを哀れんでなのか、道案内まで引き受けてくれる。そのお陰で母親らは道に迷うこともなく、ときおり農家から「食べものをもらい、人の家で眠ることが出来」(100頁)る。なかでも彼女の道案内としての有望ぶりが最も発揮されたのが、フィリピン・ゲリラに遭遇したときである。

母親らが密林の外れに差し掛かったとき、いきなり「国防色」の服を着て「手には竹槍を持」(98頁)た男たちが現われる。彼らからは日本語で「われわれのものを奪って食べ、肥え太」た「お前たちの身体」を、われわれは「取り返して、ここで、この木の肥やしにでもするのだ」(同頁)といわれ、竹槍を構えられる。日本人に間違われてしまった母親らは、「わたしたちは日本人ではない。おまえたちのものをわざと取ったことはない」(同頁)と釈明したいのに、恐怖のあまり口を開くことすらできない。先ほど密林のなかで報復を加えられ、「もう腐りかけている数多く」(97頁)の日本人女性の死体を目にしてきたばかりだったこともあり、一気に血の気の引く思いをする。

そのとき、フィリピン人慰安婦が前に進み出てフィリピン語で「手早く何かを説明」(同頁)する。すると男たちは自ら「道をあけてくれ」(同頁)て、母親らは一命を取り留める。彼女が素早く対応してくれなかったら、母親らは先ほどみた日本人女性らの死体のように、「犬死に」(同頁)になったに違いない。

この一連のエピソードは、一見何の変哲もないようにみえる。しかしフィリピン人慰安婦をめぐる表象と言説には注意を払わなければならない。まず、彼女に最も目立つのが日本語使用における不完全さである。繰り返し登場する「たどたどしい日本語」「手まね足まね」といった語はそれを端的に示す。日本語の不自由さによって円滑な意思疎通が図れず、非言語的手段に頼らざるを得ないフィリピン人慰安婦の発話行為は、いってみれば言

葉を持たない幼児の言語使用を連想させるもので、発話者と言語との間の大きな隔たりを露わにする。

ここで見落とさなければならないのが、日本語使用における母親らとフィリピン人慰安婦との歪んだ関係性である。そもそも両者にとって日本語は他者の言葉である。どちらも日本帝国という植民者／占領者によって押し付けられたものであり、そうした言語への近親性が言語的植民地性として植民地化の証なのは多言を要しない。しかし母親らは、彼女らの言語使用における不完全性をかえって他者性として位置づけ、自分らから引き離す。そうした母親らの日本語使用における優位と、フィリピン人慰安婦に対する歪んだ眼差しは、他者の言語の内面化によるねじられた植民地主義、つまり「他者の他者化」に他ならない。

かくして意識的にせよ、無意識にせよ、母親らはフィリピン人慰安婦に人種差別的な眼差しを向ける。「あの小柄な女」(100 頁)という語にはそれが集約されている。一般的に「他者」としての劣等性は、本来遺伝的な身体的特徴に基づくことが多い。それはこのテキストでもよくみられる。

「狩りだし事件」(51 頁)という労務報国会による強制徴用⁽¹⁷⁾の際の、「チョウセンジンは畜生みたいに身体が立派で、肩ががっしりしている」(50 頁)という、日本人の動員

部長の言葉はその典型例である。すると上記の「小柄な女」という語は、「畜生みたいく図体が大きい」「がっしりしている」といった劣等な朝鮮人のステレオタイプに合致するもので、差別的な眼差しが込められているのは明らかである。

もとより華奢な身体付きは東南アジア人の最も強いステレオタイプであり⁽¹⁸⁾、「小柄な女」という表象は、先述の「たどたどしい日本語」と「手まね足まね」といった言語使用における劣位性と相俟って、フィリピン人慰安婦の劣等な他者としての他者性を確固たるものにする。

詰まるところ、母親ら是对立矛盾する両極に引き裂かれた両義的存在である。一方では日本人を「未開」な民族として他者化し、かれらから押し付けられていた負の表象を転倒させ優位に立つ。また他方では植民地主義的眼差しを内面化し、これまで自分らに向けられていた差別的眼差しをさらなる他者に向けて日本帝国の植民地主義的暴力を反復する⁽¹⁹⁾。以下で明らかになるが、こうした母親らの内的矛盾と両義性は彼女らの存在否定へと繋がる。

3. 引き裂かれてゆく女性主体——女性嫌悪と母殺し

3.1 他者化の矛盾——消え去りつつある存在意義

(17) このテキストによると、「狩りだし事件」とは「日帝末、労務報告会が南洋の軍属を徴収するために、慶尚南北道に動員隊を配置して、現地人青壮年を手当たりしだいに捕まえて引っぱって行った事件」(51 頁)で、「通りで、野良で、家宅搜索で、朝鮮人男性たちは野獣のように狩りだされて、ついには、太縄で縛られて、護送車に乗せられて行った」(51～52 頁)とされる。朝鮮労務報国会についてはまだ不明な点が多く、今後の研究が待たれるが、とりあえず植民地時代の朝鮮人労働動員における不平等性と戦後への繋がりの一端を示すものとして、小野俊彦「門司港の朝鮮人港湾労務者——主体をなり損ね、暴力を記憶する——」『立命館言語文化研究』19 巻 2 号、立命館大学国際言語文化研究所、2007 年、127～135 頁を紹介しておく。

(18) 韓国で東南アジア人に対する人種差別的な眼差しが形成されたのはベトナム戦争への参戦後からで、現在のステレオタイプはほぼその時に作られたものである。これについては、キム・ソンベ「越南から帰ってきて」『国語国文学』第 33 巻、韓国国語国文学会、1967 年、94～101 頁や、ユン・チュンロ「ベトナム戦争期の韓・米・越の関係にみる韓国人のアイデンティティ——植民地的無意識と植民主義的意識の間で——」『談論』201 第 9 巻 4 号、韓国社会歴史学会、2007 年、171～203 頁などを参照。

(19) 母親らの植民地主義的眼差しの内面化による他者の他者化は、西洋人男性から女性としてジェンダー化された西洋女性が、オリエント女性との関係のなかで彼女たちに女性性を与え、彼女たちを自分の他者とすることで、自分自身を男性性としてジェンダー化していることと通底する。これについて詳しくは、岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』青土社、2000 年を参照。

先ほどの「他者の他者化」という二重にねじられた母親らの眼差しは、皮肉にも彼女らを、これまで一貫して差別的な眼差しを向け、忌み嫌っていた日本人慰安婦らに急接近させる。それが最も端的に示されているのが、母親らの「軍票」への拘りである。

日本軍の性暴力に苦しめられていた母親らにとって「身体を代償に得」(94 頁) た「軍票」は、まさに恥辱の象徴である。しかしいつのまにかそれは彼女らの「期待できる唯一の希望であり、命」(100 頁) に変わる。逆説的にも軍票こそ、「異常な生き地獄」(92 頁) に耐えて生きる唯一の原動力として、「故郷までとはいかなくても、国に帰って、小さな食堂か喫茶店を持」(同頁) ちたいという、彼女らの細やかな「未来」へ繋がる「最後の希望」(同頁) となる。

激化する戦場に取り残された彼女らが、重たい軍票の束を大きな風呂敷に包んで避難したのも、そしてその途中、彼女らを哀れんだ敗走兵から「もうくずだ。すてろ」(99 頁) といわれても、頑なに「補償されると信じ」続け、最後まで捨てきれずにいたのは、その「ごみくず」(92 頁) に生きる希望を見だし、「望みを繋いで」(99 頁) いたからに違いない。彼女らにとって軍票は「命」と等価なのであり、それを捨てることは生きることを諦めることに等しい⁽²⁰⁾。

ただ「軍票」にすべてを託し、それを守りぬこうとする彼女らの姿は、もはやかつての日本人慰安婦らにからかわれていた、「九州にある軍隊の洗濯婦に行く」(80 頁) と思い込んでいた「田舎娘」のそれではない。そうでないどころか、逆に彼女らがそれほど嫌っ

ていた「お金稼ぎに行く」日本人慰安婦らに酷似している。敗走中、父親が露わにした母親への怒りはそれと無関係ではない。

母親の献身的な支えにより、脚の状態がよくなった父親はある日、彼女を誘って二人きりになる。そして突如、日本が戦争に負けても国には戻らず、今のようにココ椰子を栽培しながらフィリピンで暮らすことを切り出す。何があっても生きて帰ることしか考えていなかった母親は彼の真意が理解できない。すると父親は、「おれはおまえを見るたびに悲しくなる」「わけもなくやたらに悲しくなる。そして、怒りが込み上げてくる」(118 頁) と、怒気を露にする。しかしその正体が不明確なためか、母親はますます困惑するばかりである。

それを見かねた父親は、「どうしてこんなに腹立たしいの」か「いっぺん深く考えてみたんだが」(119 頁) と前置きしながら、ついに「それは国の娘が持っている、その薰り高い姿⁽²¹⁾が、お前にはないから……」(同頁) と決定的な言葉を口にする。このテキストではそれが彼の怒りの根源を探る唯一の手掛かりであるが、あまりにも抽象的な言い回しのため、その作業は容易ではない。ただ、ひとつ明確なのは現在の母親の姿が全否定されていることである。それには先述の日本人慰安婦との近接性が大きく関わっていると思われる。

軍票に拘り、どんな恥辱のなかであろうとも生きていこうとする屈強な女に変わった母親に、かつての純粋な「田舎娘」の姿を見つけ出すことは困難である。それゆえに、これまで貞操概念の高さから民族的優位性を強調してきた彼女は、同じ民族の男にその誇り高

(20) 慰安婦らの「軍票」への拘りはこれまでしばしば問題の種となった。近年の『母・従軍慰安婦』を原作とした演劇『鳳仙花』をめぐる軍票論争もそのひとつである。議論が巻き起こったのは 2014 年のアメリカツアー中で、二人の元慰安婦のハルモニらが内容の一部について抗議し、変更を求めたことがきっかけとなった。ハルモニらは、着物を着た一人の慰安婦が軍票を空中にばら撒き、それをまた着物姿の慰安婦らが拾う場面が、慰安婦に関する事実を「歪曲」しており、誤解を招く余地があると不快感を露わにした。以降、ハルモニたちと劇団、慰安婦関連団体、マスコミ、市民らを巻き込んだ「慰安婦軍票論争」と呼べる事態に発展する。ハルモニらの抗議及び劇団の応答などについては http://www.news1.com/ar_detail/view.html/?ar_id=NISX20140805_0013090330 (visited on 29 June 2017) を参照。

(21) この個所の和訳と原語の間にはニュアンスのずれがある。意訳の「薰り高い姿」という語からは奥ゆかしさや凛々しさなどが連想されるが、原語では「質朴で素朴な美しさ」となっていて、母親らの慰安婦になる前の純粋さや素直さ、飾り気のなさなどといった純真な少女のイメージと繋がっている。

さをすべて否定される。生き残るため、「自らが変貌」(119 頁)し、「煩わしい被害者意識」(同頁)など「さっさと脱ぎ捨」(同頁)て、「軍票」に生きる「希望」(97 頁)を見出していた母親(ら)の逞しさが、父親に代表される被植民者の男たちには許しがたいものだったに違いない。

やがて父親の怒りは日本軍に占領され、精液まみれとなった母親の身体に向けられる。「慰安婦」という彼女の不浄な身体は、父親の「想像を侵犯している、恐怖」(120 頁)の対象、つまり「おぞましいもの (abjection)」に等しく⁽²²⁾、近づくことが阻まれている。他の朝鮮人慰安婦らの間では「夫婦以上」(同頁)と思われていたにも関わらず、父親は滅多に母親の「身体に手を触れることがな」(同頁)い。

その挙句、「そんなに多くの男の相手をすれば、女のあれは、おしまいになるんじゃないか」(同頁)と子宮への拘りを見せる。それが母親の身体に対する嫌悪を伴った「恐怖感のせい」(同頁)なのはいうまでもない。彼女が帰国後「あんなに懐かしかった故郷に、再び戻ることができないという恥ずかしさ」(121 頁)に打ちのめされ、何の縁もない釜山の一角でこっそり暮らし始めたのは、父親の恐怖感＝嫌悪感とそれによる「棄却」と不可分である⁽²³⁾。

かくして父親の「怒り」は母親への侮辱として表われる。「淫売」という語に集約されているように、父親の侮辱は彼女の日本人慰

安婦との近親性の裏返しである。そして日本軍に占領されていた母親の子宮への嫌悪＝恐怖は、生まれてきた息子の否定に繋がる。父親の侮辱＝棄却により、母親が不可視な存在として物語から遠のいてゆく。

3.2 象徴的母殺し——新たな物語の始まり

母親の精液まみれとなった身体は、従来の男性中心主義的なジェンダー規範を揺るがすものである。軍票に夢を託し、生きることに拘っていた彼女の日本人慰安婦との近親性は、日本軍の「性器の銃撃」(115 頁)によって傷つけられた女性身体への嫌悪にすり替わり、父親からつねに「淫売」「汚い階級の出身」(54 頁)「小便くさい」(59 頁)と罵倒される。

母親に付き纏われている「汚さ」が、日本軍の精液に「汚された」慰安婦身体と無縁でないのはいうまでもない。そのなかで注目し値するのが、そうした父親の嫌忌が息子の「僕」によって反復され、強化されていることである。「僕」の母親の身体に対する嫌悪感が引き金となった「「オクニミ」事件」(19 頁)ではそれが象徴的に描かれている。

母親は「慢性の婦人病患者」(13 頁)である。四十歳ぐらいの若さで閉経を迎え、その後、子宮筋腫ができて「妊婦のように少しづつ下腹が出」(同頁)てきている。「危険な悪性のものではな」(同頁)かったため、本人もさほど心配していなかったが、問題は度々起こる鮮血の不正出血である。母親は何か

(22) これまで朝鮮半島では同様なことが繰り返されてきた。中でも最もよく知られているのが「還郷女」である。その語は高麗時代に朝貢品のひとつとして中国に送り込まれた女性である「貢女」のなかで帰国できた人を指すものだったが、朝鮮中期から蔑称に変わる。正確な人数は知られていないが、17 世紀に清に連れて行かれた多くの朝鮮女性が性奴隷に転落していたことから、苦勞して戻った女性たち＝「還郷女」を忌み嫌い、差別するようになったといわれる。以降、その語は売春を行う淫らな女性を指すようになり、現在も同様な意味で使われている。宗主国の男たちの性的道具となっていた「還郷女」は、男たちの歴史的トラウマを示す象徴的記号なのであり、日本軍慰安婦らがその延長線上にあるのは多言を要しない。「還郷女」については、チョン・チャンイル『非理性の世界史』ヤン Chol Book、2015 年を参照されたい。また「おぞましいもの」についてはジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力——〈アブジェクション〉試論』法政大学出版局、1984 年を参照。

(23) その意味では「晋州」——和訳では「鎮州」となっているが、「晋州」の間違いと思われる——という彼女の故郷はさきで明示的である。そこは豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に宴会の席で日本の武將・毛谷村文助を抱きかかえ、ともに川に身を投じた義妓・論介の生まれ故郷であり、今なお愛国忠節の地として最も名高いところである。敵將に犯されるところか、命を捧げ、国を救った論介こそ、「国の娘」の「薫り高い」人物に他ならない。それが軍票を生きる「唯一の希望＝命」としてきた母親らの姿といかに違うかは想像に難くない。彼女が生まれ故郷を捨てて自ら「孤児」にならざるを得なかったのはそれと無関係ではなからう。

あると必ずといっていいほど大量の血を流す。原因は不明で、医者からは「お前のかあさんは、神経で出血もすれば、神経でなんともなくなったりする人」(19頁)といわれる。

ところが、その神経性の出血がときおり不思議な力を発揮する。麻薬密売者として「巻き添えを食らって、一週間留置場に厄介になった」(18頁)ときのエピソードはその一例である。思わぬ拘束でまたもや神経が刺激されたのか、母親は「留置場の板敷きの上に血が溜るほど、ずっと出血しつづ」(同頁)け、特に理由もなくひとり釈放される。不正出血はしばしば「奇妙な神痛力」(同頁)をみせ、彼女を危機から救ったりする²⁴が、「僕」にはそれゆえにかえって「むごたらしい妖術」(17頁)のような、得体の知れない不吉なものにみえる。

「『オクニミ』事件」が起きたのは「僕」が高校二年の時である。ある日母親から初めて、「僕」の中学校進学の際に父親に無理矢理に頼んで戸籍に入れてもらったことを打ち明けられる。すると「僕」は、一度「大人の目で、父という人をはっきりと」(20頁)みてみたくなり、その日すぐに列車に乗り込んで父親の家に向かう。駅前の飲み屋で酒を飲んでいて彼と久しぶりに再会したものの、金をせびられたうえ、また「お前、どうしてそんなにチョッパリに似てるんだ」²⁵(22頁)、「一番汚い種」(23頁)と罵られる始末となる。

父親に金を全部取られ、やっとの思いで家

に戻った「僕」は数日後、「チョッパリに似てる」といわれたことを母親に話す。そうしたら彼女は「おまえは、絶対にあの人の息子だと、叫んで、気を失」(27頁)う。まもなく意識は戻ったが、この日はなかなか出血が止まらず、医者注射を打ってもらって眠りに落ちているにもかかわらず血を流し続ける。「敷布団のすみに錆びついていく血を見」(28頁)ていた「僕」は、「むかむかと吐き気を覚」(同頁)え、「これまでになく心が乱れ、もう耐えられなくな」(同頁)り、「表へ飛び出してしま」(同頁)う。

しかし行くところがなく、街を彷徨っていた「僕」は偶然、劇場の前で小学校三年の時の「相棒」(29頁)だったオクニミに行き会う。あまりの嬉しさに「金剛山へ行こう」と、昔の春遠足で一緒に訪れたことのある山のところへ散歩に誘う。当時、お昼を食べていた大きな岩に腰を掛けると、中学校卒業後「検番の童妓になっ」(29頁)た彼女が、「ちょうど明日あさってがわたしの童妓顔見せの日なんだ」(32頁)と言い出す。

「大体五十」の「紡織会社の社長」(同頁)に水揚げされ、「自分よりも早く大人になる彼女の「裏切りをはらんだ成熟の臭い」(同頁)に、「僕」は「妙な劣等感」(同頁)を感じる。次の瞬間、「僕」は彼女を倒し、むりやりチマをめくり上げる。抵抗する彼女に「静かにしろ。静かにしないと殺すぞ!」(同頁)と脅かし、犯す。行為の後、「脱力感のうち

(24) 「赤不浄」という語からも分かるように、血は女性の不浄性と表裏一体である。その意味では母親の不正出血は彼女の不浄性を示している象徴的記号といえる。ただこのテキストではそれが両義的である。一方では先ほど述べたように、彼女の身体の不浄性を示すとともに、他方では自己浄化の機能を担っている。彼女の不正出血が山蛭に血を吸われた後から始まっていたのは後者の機能を物語っている。前述の「人肉食」の事件後、母親らと父親は敗走部隊から逃れて朝鮮人だけで避難することにする。かれらが山で夜を過ごす際に最も厄介だったのが山蛭であった。「目にくっつけば、目を失い、股にくっつけばももが腐るほどの血を吸」(115頁)うため、命まで危ぶまれたりするが、母親の場合は逆に「そのおかげを被」(116頁)る。明け方、下半身にくっついて山蛭をみてびっくりした母親は、慌てて小刀で切り離す。しかし「全然不快ではなくて、むしろ、悪い血が抜けて行くように心許ないけれど、すっきりした感じが」(117頁)し、「しばらくすると、不思議なことに傷口の晴れも引」く(同頁)。おそらく彼女の「神経性」の出血は、山蛭の吸血と同様な機能を担っているように思われる。ときおり不浄な血を流すことで、山蛭に血を吸われたときと同じく、彼女は「すっきり」し、生まれ変わるのだろう。

(25) 「チョッパリ」は韓国でよく用いられる日本人に対する蔑称である。原注によると「チョッパリは、牛の足のよう蹄が割れているもの。日本人が下駄を履く様子がそのような動物に似ているところから、日本人に対する卑称として使われる」という。ちなみにその蔑称に因んでしばしば在日朝鮮人のことを「半チョッパリ」と呼んだりする。

に聞く彼女の息遣い」(同頁)は生々しく、急に恐怖を抱かされた「僕」は闇の中に彼女を一人残したまま、追われるように山を下りてくる。

この「事件」はきわめて象徴的である。ここでは何より四人の登場人物の関係性が明らかになっている。

先述のように、この「事件」は血を流す母親への嫌悪に触発され、中年の旦那に水揚げされたオクニミに対する性的「劣等感」によって起きた事件である。「僕」にとって母親の身体に対する嫌悪感と、オクニミに対する性的劣等感は同一線上で繋がっているのであり、どちらも女性嫌悪に貫かれている。その意味では母親とオクニミの間に分身的な関係が認められる。そういえば、闇の中、岩の上で血を流しながら一人横たわっているオクニミの姿は、父親に性的侮辱を受けて出血し続ける母親の姿と大きく重なる。結局、「オクニミ」事件は「僕」における父親の母親に対する性的侮辱の反復なのであり、それは父親と「僕」、母親とオクニミの鏡像の関係性によって可能となっている。

最後に付け加えておくべきは、「僕」のオクニミへの性的侵犯が「人を殺す気分」(32頁)に酷似していることである。「僕」が行方中に「人を殺す気分そっくりのものを」(同頁)感じ、彼女を「本当に殺したと思っ」(同頁)たといわれていることから分かるように、「僕」の性的侵犯によって彼女は一度「死んだ」

のだ。その「死」は当然、分身的関係にある母親の「死」をも意味する。そうすると「オクニミ」事件は象徴的な母殺しに他ならず、これまで父親に侮辱されてきた母親はここで完全に棄却される。

この事件以降、母親が物語との接点を失い、後景化されるのは偶然ではない。そうした母親の姿は「生娘ではなかった」(33頁)ことで旦那に「疎んじら」(同頁)れ、結局「界限を離れ」(同頁)て姿を消したオクニミと呼応している²⁶⁾。こうした母親の後景化は物語を一変させる。彼女に代わって物語の前景に躍り出るのは父親であり、彼と「僕」との「戦い」が物語を中心に据えられる。以下ではそれがどういうもので、そこで何が行われているかをみることにする。

4. 脆弱な男たちの「戦い」とその後で

4.1 「父」の／という呪縛——エディプス的葛藤をめぐるドラマ

『母・従軍慰安婦』は一見慰安婦小説に見える。しかし物語を組織立てているのは父子の確執と軋轢をめぐる家族ドラマであり、慰安婦物語はそうした両者を和解へ導く導管として機能する。一般的に父子の物語を支える物語構造はエディプス的葛藤＝父殺しであり、このテキストも例外ではない。

先述の象徴的母殺しは「僕」を父親に近づかせる。「淫売のガキ」(15頁)という語か

(26) 母親とオクニミの分身的関係は男に対する従順性からも読み取れる。母親の場合、「淫売」「淫売のガキ」という語に対する拒否反応を除けば、父親に逆らうことはない。「僕」の「怒りがこみあげてくるほどだ」(12頁)という言葉が示すように、父親に対する母親の忍従はときおり理解を超えるものである。同様なことがオクニミからも読み取れる。テキストの最後には「僕」の性的侵犯によって「界限を離れ」(同頁)れ、物語からも追放されていた彼女が、「僕」をまったく恨んでいないことが明かされている。僕の回想によって蘇った彼女との偶然の再会によると、彼女は「僕」を恨むところか、「決して疎ましい記憶ではない」「そういうのが人生じゃないか」(同頁)と、一人ですべてを受け止め、耐え凌ぐ。こうした彼女の姿は父親に忍従し続ける母親の姿と酷似している。ここでひとつ看過できないのは、オクニミの従順性が最終的に「僕」の「罪」に対する免罪符——そもそも「僕」は、「あいつ(——オクニミ、引用者)のために特別心が痛むというわけでもない」(27頁)といわれていることから分かるように、彼女に対する罪責感などありはしないが——として機能していることである。これがいかに男性中心主義的な見方なのかはいまでもなく、つまるところ母親とオクニミの忍従性は父親と「僕」に対する赦しとして機能しているといえる。

(27) フロイトの用語では、これは「一次的ナルシズム」と呼ばれるものに相当する。ラブランシュ・ボンタリスはこれを「外界の対象以前に自分自身を対象とする幼児のナルシズム」である、としている——これについてはラブランシュ・ボンタリスの『精神分析用語辞典』の「一次的ナルシズム」を参照。また実際、フロイトはこれについて語るにあたって子宮内での胎児の状態を念頭においている。

ら読み取れるように、父親にとって「僕」はあたかも「主客未分」の状態²⁷⁾のように、母親と一体化された存在である。しかし母親の身体に対する嫌悪がもたらした母殺しという象徴的な出来事により、「僕」は父親と鏡像的關係になる。

「オクニミ事件」は「僕」と母親との主客分離の役割を担う物語装置なのであり、その事件後から「僕」に対する父親の蔑称が「疫病神のような奴」(58 頁)と変わっているのは暗示的である。というのも、父親こそ「疫病神」であるからだ。「こんなひどい疫病神に引っ掛かって……」(同頁)という、父親が「僕」と母親を捨てた後、一緒になった女の嘆きが明かすように、彼は「女の厄介にな」(105 頁)るばかりの「情けな」(同頁)い男、つまり「疫病神」なのである。父親の「疫病神のような奴」の「ような」が示すように、まだ彼と「僕」の間には若干の隔りがあるものの、互いにとって厄介な存在という意味では相通じる。

そうした類似性は両者を切り結ぶことなく接近させているが、逆説的にも「僕」が父親に近づけば近づくほど、より目立ってくるのが二人の間の溝である。そこに横たわっているのが、「僕」に対する父親の根源的な存在否定であるのはいままでのない。象徴的母殺し以降、聞くことがなくなったとはいえ、「淫売のガキ」「チョッパリに似てる」「一番汚い種」「倭奴の種」²⁸⁾といった父親の謎めいた言葉は、「僕」の「記憶の隙間に釣り針のように引っ掛かって、絶え間なく腐った思いを増殖さ」(16 頁)せ続ける。大人になった今でも「ふっきれない疑問点が多」(同頁)く、「三七年間」(10 頁)も「僕」を悩ませてきた父親の侮蔑は彼を呪縛し、強い劣等意識として表われる。「僕」はときおりその「限界の垣根を越えようとあが」(同頁)くが、「結局は倒れて、餓えて、眠だけ」(同頁)である。

そのなかで「僕」は一大復讐戦に挑む。「五年間、一編の小説も書け」(同頁)なかった彼は、ついに父親への「憎悪を、ひとつひとつより出して原稿用紙を」(同頁)埋めた作品を描き下ろす。そこでは自分を「チョッパリに似てる」「倭奴の種」と罵り、汚いもの扱いをしてきた父親を、逆に「日本人を装う醜悪な人格破綻者」(72 頁)として描き侮辱する。しかも小説の最後が「一人の病んだ父親」が「裸のまま、凄惨な姿で死んで」(同頁)いるシーンとなっているのはきわめて明示的である。これはまさしく「父殺し」なのだ。

父親に対する劣等感を父殺しとして形象化した小説の完成は、一見復讐を遂げたかにみえる。しかしそれは見事に失敗に終わる。長い沈黙を破り、彼からの侮辱をそのまま投げ返してみたものの、やはり「僕」の「引きずってきた限界を越えるものではな」(10 頁)く、しかも「僕」にとって失敗の代価はあまりにも大きいものとなる。

出版社から原稿料と掲載雑誌を受け取った日、「僕」はたまたま通りかかった路地で郵便局を発見する。すると「父親に小説を読ませよう」(13 頁)という「底意地の悪い妙な衝動」(同頁)に駆られ、自分の小説の箇所にわざわざ折り痕を付けて送り込む²⁹⁾。そして作品を読んだ父親がショックを受け、小説のラストシーンと同様に「凄惨な姿」で「衝撃死」(同頁)を遂げることを密かに空想する。

その夜、「僕」は家に帰らず女を買う。「女と思いきり遊んだら、風呂に入ったようにすっきりした気分になる」(同頁)と思ったが、「どうしてなのか、女に触れただけ」(同頁)で「僕」のものは「力無く萎えてしま」(14 頁)う。父親への「底意地悪い衝動」によって誘発されたこの「失敗」(13 頁)が、彼への復讐劇の行方を暗示する伏線なのはいままでのない。小説を読んだ父親が、まるで自分の話を売った金で女を買った「僕」を嘲笑うかの

²⁸⁾ 「倭奴」も「チョッパリ」と同じく日本人に対する蔑称の一つである。

²⁹⁾ 和訳では「わざわざ自分の小説が掲載されたページまでを破りにとって」(13 頁)となっているが、本稿では原書の内容に従った。

ように、「衝撃死」どころか、「笑ってやり過ぎ」(40 頁) していたことはそのためである。父親への復讐劇は「僕」の完敗で幕を閉じ、「僕」はますます劣等感の虜になって「自分の沼から抜け出す力」(10 頁) を失う。

この復讐劇で注目になるのが、女に触れるや否や「力無く萎え」た「僕」の姿である。それはまるでエディプスの葛藤における去勢不安を連想させる。「僕」の性的機能不全はいわば象徴的去勢として、父親を「チョッパリの振りをする人に仕立て」(41 頁) た拳句、「衝撃死」を夢想していたことに対する「罰」に他なるまい。男性性を傷つけられた「僕」が二度と父親に復讐を挑むことはない。否、出来ないといった方が正しい。三十七歳になった「僕」が今でも自分の出生をめぐる根源的な不安を抱え、つねに／すでに迷路を彷徨っているのはそうした傷ついた男性性と不可分である。

そのためか、「僕」は自分の存在証明に関わる「血縁関係」(64 頁) や「血筋」(72 頁) に拘る。このテキストが「僕」の「出生についての問題」(9 頁) をめぐる、父親との「因縁の絆」を(同頁) 解くことに費やされているのは偶然ではない。二人の関係を明確にすることこそ、「僕」にとって父親の呪縛から逃れ、失われた男性性を回復する唯一の方法だからである。

そのために召喚されたのが、象徴的母殺しによって後景化していた母親である。彼女によって紡ぎ出された慰安婦物語は、あくまで父子の「因縁の絆」を解くために挿入された物語装置なのであり、それ以上でもそれ以下でもない。その意味ではこのテキストは「僕」の出生をめぐる父子の確執と和解を描いた男

たちの「戦い」の物語なのである。

4.2 失われた男性性を求めて——アイデンティティの縫合とその彼方へ

「僕」の傷ついた男性性の回復の担い手は父親である。先にも述べたように、復讐戦に敗れ、象徴的に去勢された「僕」にとって自分の侮辱の源泉を掘り下げてゆくことの他に、父親との確執を乗り越え傷ついた男性性を癒す手立てはない。ここで忘れてはならないのが父親も男性性を深く傷つけられた人物ということである。

前述のように、父親は太平洋戦争中、留学先から帰郷の途中に連行され、家族に別れを告げることもできず、そのまま学徒兵となった人である。しかし太腿に大怪我を負い、男性性を深く傷つけられると女の厄介になるばかりで「疫病神」呼ばわりされる。ただここで重要なのは、象徴的去勢が行われた彼の身体が主権を失い、日本の植民地となった「国＝朝鮮」のメタファーとして機能していることである。母親らにとって「生きる唯一の希望」であり「命」だった軍票を、「人の命より重くはない」(102 頁) とすべて捨ててまで彼を助けていたのはそのためである。

さらに、国家身体としての父親の象徴性をより確固たるものにしているのが苗字である。彼は登場人物のなかで唯一苗字を持つ朝鮮＝韓国人である³⁰。「ペ・グァンス」——これが彼の名前である。一応、母親も「スニ」³¹という下の名前を持っているが、苗字は明かされていない。それは彼女が「十七歳の時、孤児になっ」(84 頁) たことと無関係ではないように思われる。

「十七歳」は彼女が家族と引き離され、フィ

(30) むろん、彼の息子である「僕」も苗字を持っていることになるが、彼が真に苗字を獲得するのは父親と和解ができたときである。ところで、このテキストではもう一人の朝鮮人の男が登場する。特攻隊として命を落とした少年兵である。彼も父親と同じく脚を怪我していて、主権を失っていた国のメタファーであるのはいうまでもない。ただ、彼は「陸軍病院」で治療を受けて脚を治しており、その後、戦死することとなる。それは彼が子供のとき両親を亡くした後、日本人の家に養子となっていることと無関係でなく、それゆえ名前が明かされていなかったと思われる。

(31) 「スニ」という名は、「花子」のように、子供の女の子を代表する象徴的な名で、個人を指す固有名詞であると同時に、女の子全体を表わす総称名詞でもある。そうした名前が付けられた母親は、ある日突然連行され、慰安婦になった少女たちの代表といえる。

リピンの慰安所に送られた歳で、その時から彼女は家との連続性＝歴史を絶たれることになる。慰安所では生きて故郷に帰ることを夢見るが、いざ帰国すると慰安婦だったことへの恥ずかしさで彼女自らが故郷を捨てる。断絶された「家」との繋がりが回復されることのなかった彼女は、まさしく「孤児」なのである。

母親の苗字が伏せられていたのはそうした「家」との断絶性を示すものであり、その意味では父親だけが「国＝家」の歴史的連続性を担う人物となる³²⁾。そうした彼を、母親が日本人に「安楽死」させるわけにはいかない。なぜなら父親を救うのは彼女がかつて「家」を守るために「兄の徴用の代わり」に「挺身隊」に志願したのと同じく「国」を守ることであり、「国＝家」を守ることこそ、このテクストにおける彼女の存在意義・役割だからである。

ところで、問題は父親の傷ついた男性性がなかなか回復できずにいることである。帰国後、彼の象徴的去勢は精神的脆弱性にすり替わり、なおも怪我した脚を引きずって植民地時代を生き続ける。彼を苦しめてやまなかった日本帝国への「被害者意識」はやがて「日本の亡霊」(62頁)と化し、激しさを増す。「死ぬ瞬間まで幻覚に悩まされている」(59頁)た彼は、結局それによって「心臓麻痺を起して」(62頁)命を落とすことになるが、とりわけ「幻」との戦いが頂点に達していた亡くなる数日前からは彼の苦しみが端的に示されている。

「こいつ、おまえは、まだこの家にくっついていていいのか。さっさと出て行け！ここはおれの家だ。出て行かないなら殺してやる」(同頁)と暴れたり、「けがもしていない太腿をつかんで『死んでいる』と叫んだ」(61頁)り、また敗走中に自分を見捨てていた「イ

トウ」の名前を呼んで、「おれは帰らなければならない、イトウ、おまえが家族に会いたいように、おれもやっぱりおやじに会わなければ。(中略)イトウ、頼むからおれをちょっと助けてくれ」(62頁)と訴えたりする。

かつての「安楽死」の危機を思い出させるこうした幻覚による植民地的状況の再現からは、父親にとって植民地化と太平洋戦争への動員がいかに屈辱でトラウマ的体験だったのかがよく読み取れる。植民地解放から四十年近くの歳月が流れたのに今なお戦中を生き続け、彼の心に残された被植民者としての生々しい記憶は癒されるどころか、さらに壮絶さを増す。

そうした父親からすると、母親はアンビバレントな存在である。一方では安楽死の危機から救ってくれた命の恩人でありながら、他方ではそれゆえにかえって自分を再び「絶望の縁」(124頁)に陥れ、その出口を塞いでいる厄介な存在である。日本の敗戦から二ヶ月後、「米軍の輸送船で帰国出来た」(121頁)父親が「孤児」になることを選んだ母親を見捨てられず一緒になったものの、結局彼女を離れたのは、まさしく母親が彼の最も「切り離してしまいたかった」「学徒兵から帰国までのその三年の歳月」(同頁)を思い出させる「おぞましいもの」だったからに違いない。その意味では「淫売」という彼女に対する侮辱は、彼のトラウマ的経験がもたらしたパラノイア的強迫観念といってよい。

これまで父親の過去について何も知らなかった「僕」は、母親の告白＝慰安婦物語により、初めて彼の苦しみと悲しみを理解し、受け止めることができる。そのとき、「僕」はもはや「淫売のガキ」として「恥辱的な過去の産物」(121頁)ではなく、「真」の息子として「新しく生まれ変わる」(73頁)る。

「かあさんは、僕を産んでからペ・ムンハ

32) 「孤児」になることを選んだ母親と異なり、父親が実家を訪れ、家族と再会していたのはそれを端的に示す。母親と「僕」を捨てて家を出た父親は、朝鮮戦争中に会った正式の結婚相手と連れて両親を訪ねる。その時初めて兄も連行され、消息不明であることを知る。しかも兄の連行に腹を立てて倒れていた彼の両親が父親との再会後に立て続けに亡くなってしまうと、彼は立ち直ることができなくなる。ちなみに仕事もせず、いつも酒ばかりを飲んでいて、妻から「疫病神」扱いされるようになったのはそのためである。

として、育ててきたつもりだけれど、僕は、今、やっとペ・グァンスの息子、ペ・ムンハとして完成したのです」(同頁)といわれることから分かるように、「僕」はついに父親の苗字を受け継ぎ、「家」の縦断的連続性を確保する。そしてそれにより「千代、万代家を継いでいく健やかな息子」(123頁)として、「この土地で暮らしてきたペ氏の家の永遠のつながり」(同頁)を育む唯一の後継者＝歴史的主体となる。

そういえば、彼の戸籍上の生年月日は暗示的である。父親が「僕」をкаろうじて戸籍に入れてくれたとき、わざわざ生年月日を二年遅れにしていた。しかしそれによって大きな支障となったこともなかったので、母親も「確かなにはっきり知っているのに、どうして二年もずらしてしまったのかかわからない」(22頁)と不思議に思うばかりであった。

その謎が物語の最後によく解ける。「それはお父さんが残した、たったひとつの希望」(134頁)という語が端的に示すように、父親は密かに新しい歴史を息子に託していたのだった。というのも「僕」の戸籍上の生まれ年となった一九四八年は、植民地解放から初めて韓国の政府が樹立され、新たな歴史を刻みだした年だからである。学徒兵として連行され、脚を怪我していた父親が植民地朝鮮の悲しみの象徴であるとすれば、息子の「僕」は新生独立国として出発し直した韓国の象徴といえる³³。

つまるところ、このテキストは「僕」の父親との和解とそれによる自己再生の物語なのであり、決して慰安婦小説ではない。「僕」に受け継がれたのが慰安婦だった母親の悲しみや苦しみではなく、あくまで父親のそれであったことはその証左である。かく「(国)家」の後継者として男性性を獲得した「僕」は作家として、これから結び直された父親との「絆」を新たな「物語＝歴史 (histoire)」とし

て紡ぎ出してゆくだろう。

おわりに

韓国の文学史上、初めて慰安婦を主題化した『母・従軍慰安婦』は、とりあえずこれまで見えない存在とされてきた「従軍慰安婦」に表象と物語の形式を与えたといえる。それによって、それまで表象困難とされてきた彼女らの存在をめぐる解釈的枠組みがもたらされ、帝国主義と植民地支配、そして戦時性暴力に関する表象と物語の源泉としてその後の文化的生産物の想像力に大きな影響を与えている。ただ、このテキストは注意深く読まなければならない。というのもこの小説は慰安婦小説ではないからである。

『母・従軍慰安婦』は、前半と後半の異なる物語からなっている。前半では主人公の「僕」と父親との確執と軋轢を中心とした父の物語が、そして後半では慰安婦の苦しみと悲しみが具象化された母親の物語が挿入され、拮抗しながら最終的には自己存在をめぐる根源的な不安を抱える主人公「僕」の自己同一性の獲得の物語に統合されている。

テキスト全体を通して物語を担っているのはあくまで父親であり、母親は「僕」の出生をめぐる父子の長い「戦い」を和解へと導き、両者の絆を結び直す導管として機能する。このテキストを組織立てている「僕」の出生をめぐる父子の「戦い」は父親の歴史的トラウマを下敷きにしており、そのため「僕」の自己同一性をめぐる物語はナショナル・アイデンティティの縫合という大きな物語に回収される。その意味ではこのテキストは男性性を傷つけられた脆弱な男たちの再男性化の物語といえる。

男性身体が国家身体の変換として機能するこのテキストでは、「ペ・ムンハ」として自己同一性を獲得し、「国＝家」の正統

33) また、父親との和解が「僕」が生まれて三十七年目に行われていることも偶然ではない。朝鮮が日本統治を受けたのが約三十六年間であり、その意味では「僕」の三十七歳にも植民地の経験を乗り越え、「新しく生まれ変わる」という意味が込められている。

性を受け継いだ「僕」が、父親に代わって新たな歴史＝物語の担い手となる。父親の死によって物語が始動したこのテキストの最後が、「うちの垣根から入ってく」（124頁）る亡き父親の姿を、「夢路をたどる」（同頁）「僕」が見ることで閉じられているのは暗示的である。

「僕」の眠りと父親の死は表裏一体なのであり、そこで父親の悲しみは癒され、「僕」は新たに生まれ変わる。父親の苦しみの共有を通じて行われた「僕」の父親への取り込み的同一化は、亡き父親に「(国) 家」という「安住の地」をもたらし、その魂を鎮める機能を担うとともに、新たな物語＝歴史の担い手として「千代、万代」続く「国＝家」の連続性を紡ぐことを可能にする。

最後に忘れてはならないのが、このテキストを貫いている強い女性嫌悪である。日本軍に性暴力を受け、「たくさんの精液を、糊のように浴び」てきた母親の身体に対する忌み嫌いはそれを端的に物語る。「[「オクニミ」事件]における「僕」の象徴的母殺しは、不浄な女性身体を「おぞましいもの」として「棄却」する象徴的な出来事であり、戦後、国に戻った母親が慰安婦だったことへの恥じらいで身を潜めて生きていかざるを得なかったのはそれと不可分である。

そうした母親が存在意義を持つのは、あくまで「国＝家」を守るときだけである。しかもそのためにはいかなる犠牲も甘受しなければならない。「兄の徴用の代わり」に「挺身隊」に志願したのも、父親を助けるために命のように大切な軍票を全部捨てたのも、そして「僕」と父親の和解のために恥辱にまみれた過去をさらけ出したのも、すべて「国＝家」身体となる男たちを守るためであったことは今さらいうまでもない。

忍従と献身を強いられ、テキストの一角に抛擲される母親が物語の担い手になることはありえず、しかも女性嫌悪に満ちたこのテキストは慰安婦小説というより「反」慰安婦小説と呼ぶしかない。慰安婦物語が傷ついた男たちの男性性の再獲得を通じた「国＝家」の

再生に組み込まれるとき、彼女らの「声」がいに打ち消され、虚しく響くのかをこのテキストは例証している。

【付記】 本稿は科学研究費（基盤研究(C)、課題番号：16K02060）による研究成果の一部である。